

Title	日英語の比較 I
Author(s)	寺村, 秀夫
Citation	大阪外国語大学学報. 19 p.129-p.136
Issue Date	1968-06-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80318">https://hdl.handle.net/11094/80318</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 日 英 語 の 比 較 I

寺 村 秀 夫

## A Contrastive Study of Japanese and English I

TERAMURA Hideo

### § 1. Preliminary discussions—Basis of comparison

The ultimate goal for any synchronic comparison of two languages would be to discover and describe systematically their similarities with recourse to language universals and their differences as particulars to them. Putting aside anecdotal comparisons, most of the contrastive works so far presented with a methodological basis upon traditional or structuralistic framework seem to have missed many interesting and important linguistic facts about either of compared languages. This paper is an attempt to investigate the differences and similarities basically with the theory and method developed in the transformational grammar as its basis of comparison. For practical purposes, however, we will have to discuss some problems related to meaning on various levels besides the 'cognitive meaning,' where we may go beyond the limit of presently accepted frame of generative grammar.

### § 1. 予 備 的 考 察

1. 日本語と英語の共時的な比較は音韻の面でも文法、表現の面でも従来から色々な立場でなされて来た。が、その多くは断片的、思いつきの、言語学的体系の中での位置づけに乏しいまま「～的発想」という風に文化の差異への言及が性急に行われるきらいがあったように思われる。文法の面で比較的包括的な、そして systematic な記述としては、(1)Everett Kleinjans, *A Descriptive-Comparative Study Predicting Interference for Japanese in Learning English Noun-head Modification Patterns* (もと Michigan 大学博士論文、邦訳伊東正「日英両語の比較と英語教育」1959)、(2)小笠原林樹「日英語の表現の比較」1965 (現代英語教育講座7所収)、(3)田桐大澄「日本語の表現の比較」(2)と同じ講座7所収)、(4)空西哲郎「英語・日本語」(1963)等を挙げるべきだろう。又、現在まだ刊行中であるが(5)大塚高信監修「英語の語

法」全12巻は「表現篇」としていくつかの文法的カテゴリーを設定し、他に1巻を「語彙篇」にあて、全面的に日本語と対応させつつ英語の語法を説くという編集方針のようである。

上のうち(1)は典型的なアメリカ構造言語学<sup>(1)</sup>のこの分野への一つの適用を示すものでその点で発表当時高く評価されたものである。(2)は副題に「新言語学的比較」とあるがそれは構造主義的立場からの、という意味のようで、部分的に「文の変換構造」をいくつか対置させてあるが、全体の枠組みはやはり構造主義に基づいているといつてよいであろう。(3)、(4)、(5)は、特にどういう言語理論の体系の中でという事は断っていないが、その立場は人によって異なるにせよ、大体いわゆる伝統文法的な色彩が濃いものである。

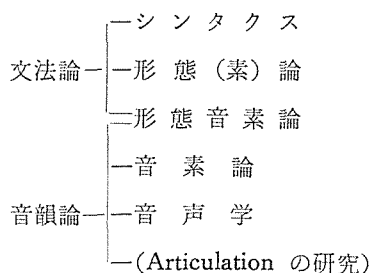
前記諸論文はいずれも英語の体系を先ず据えてそれに日本語をつき合せて行くという点が共通している。日本語について、英語に比べるとかなり多くの点で記述が充分でないことが指摘できるが、それは一つには勿論日本語の研究そのものが英語における程進んでいないという事もあるけれども、又一つにはその比較の方法そのもののせいではないかと考えられるのである。

本稿は基本的にはいわゆる変換・生成文法の考え方に立って日英両語の文法比較を試みようとするものである。言語理論の枠組みと言語の比較の方法の関連について一般的に論じる余裕はないけれども、やはり比較の基準となる基本的な問題について全く述べないわけにはいかないので、以下2と3で、それぞれ構造主義、伝統文法の立場と、それらの含む言語比較の方法論的な問題についてごく概略的に考えてみることにする。

2. Structuralism と一口に言っても、注1の論文にもあるように必ずしも同日に論ずる事はできないが、ごく大ざっぱに次のような共通の考え方を指摘することはできるであろう。

(1) 言語記述の枠組みとしていくつかのレベルを設定し、それぞれを独立した体系と考えること。そのレベルは通常次のようである。

意味論——意義素, referent, collocation 等の研究



構造言語学者達は一般に「普遍文法」なるものに対して否定的で、固有の(一を以て他を律することのできない)体系をもっているものだとする考え方から出発しているのであるが、上のような枠組みそのものについては Bloomfield 自身、人間言語に本質的に内在するものに基礎を置いていると考えていたようである。<sup>(3)</sup> この「レベルの独立性」という事が、Chomsky, Halle らの激しい攻撃的となった点であるが、それはさておき、言語の比較(Trager 以来 'Contrastive Linguistics' と呼ばれてきた)に於ても大体上のような枠組みの中で、それぞれのレベルと、そ

れを構成する form class について異同を調べていく事になる。

(2) カタチと分布に視点を置き、それぞれのレベルで ‘etic’ から ‘emic’ への原理に沿って発話を分割・分類していくこと。つまり与えられた言語資料を帰納的に分類し、共通の特徴によってレッテルをつけていくことが言語学者の仕事であると考えられているわけである。これに基礎を置く言語の比較は、同系統の言語の比較には都合よいかもしれないが、日本語と英語のように異なる体系をもつ言語の比較の場合には必然的に様々な困難が生じることになる。この方法論的な問題を正面から包括的に論ずることは今できないが、ここでは一つだけ簡単な例を挙げる。

英語には a/an, the という article と呼ばれる form class がある。a/an はいわゆる Countable Noun の前につく非（又は半）屈折語であるといわれる。その一つの機能は後に来る名詞が可算で、単数であることを示すことである。日本語についてはどうか。日本語には名詞自体に数による形態論的区別がなく、a/an に似た分布、機能をもった語類はない。語形の特徴と分布、機能を基準にして先ず英語について考え、それに日本語をつき合わせるという方法をとる限り比較は当然ここで終るわけである。所で a/an にはこれも周知のとおり、今一つ the に対して次に来る名詞が不特定のものであることを示す機能がある。この点について日本語ではどうか。日本語では形態論のレベルでは article に相当するものはないけれども、名詞の特定、不特定を区別する方法がないわけではない。例えば、

机ノ上ニ本ガアル

という型の構文では、「～ガアル」の「～」は通常不特定のもの（人）である。特定した名詞についてその存在（の位置）を述べる場合には文は

本ハ机ノ上ニアル

という型をとる。英語ではこれは

There is a book on the desk.

The book is on the desk.

の違いであろう。ついでに言う与中国語ではこれは、同じく語順の違いプラス「有」と「在」という語の（語彙的な）違いによって区別されるといわれる。

このような名詞の不特定性（又は未知のもの）と特定性（又は既知のもの）の区別は多くの自然言語に於て見られるものであるが、それは言語によって屢々異なるレベルで（或いは複合して）現われる。ここに挙げたのは一例に過ぎないが、先に述べたような構造主義的な原理に従って一つの言語の体系を組立て、それぞれのレベル、項目について他の言語を対置させて行くという方法では、多くの興味ある一般的な言語事実が見逃がされる恐れが多分にあるのではないだろうか。

(3) 各言語に即して、その固有の構造を類型化して記述すること。そこから、いわゆる表層構造を対象とし差異を数えあげることに重点をおくあまり、深層構造における類似点を看過す恐れがあるといえる。構造主義が批判の対象としたような安易な普遍言語の想定（例えばラテン文法の原理を英語その他にあてはめようとしたこと）が危険であることはいうまでもないが、人間の言

語一般に潜む普遍的なものの探求と並行して自然言語の比較を進めることが何としても必要なことであると思う。具体的には追々考えて行くことにする。

### 3. 次に伝統文法の中で行われて来た共時的比較について簡単に触れる。

前節で述べたような構造主義的傾向の反省として、伝統文法が発展させて来た理論的成果（例えば種々の文法範疇）が改めて再検討されなければならないという事が言えるが、一方構造主義者達が批判したように、伝統文法に於て範疇、語類の立て方が意味を基準にしているために屢々主観的で、客観的妥当性に乏しいことが多かった点も認めないわけにいかない。一例として空西氏前掲書の名詞の格について述べてある所を見てみる。（この論文は前述のように必ずしも伝統文法の典型的な考え方に立つというわけではないが）空西氏は格とは「名詞の方向」とであると規定し次のように分類する。

属 格	John's → mother
対 格	saw ← John
与 格	gave (← apples……対格)
	↑
	John

このような「動く」格に対して主格は「動かない格」で ← や → で表わす事はできないから

主 格      John+is reading.

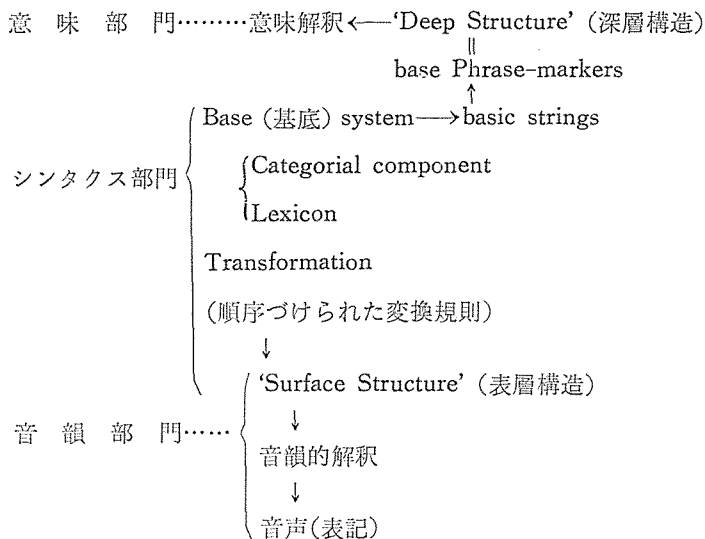
として表わすべきだとする。これに対し、日本語ではこれらの「格の意味」は助詞で表わされるが、格助詞の格というものが英語の格と同じであれば格助詞は（日本語には）存在しないというべきだとし、又英語では He is John. における John のように主語の格とは限らないからこういうものを日本語に見出すことはできない、と結論される。<sup>(5)</sup> 一方田桐氏前掲論文では、現代英語では名詞の格変化が完全に残っているのは代名詞だけで、名詞では属格だけであるとし、日本語については「日本語には格変化はない」と述べられているだけである。

### 4. 次に生成文法の基本的な立場について概略を述べる。

1957年に Chomsky が *Syntactic Structures* を公けにして構造主義言語学に根本的な対決を迫ってから既に10年余が過ぎ、生成文法論はアメリカはもとより世界の言語学界に重大な影響力を持つに至ったが、一方この間に育った新しい世代との共同研究によってその理論はかなりの部分にわたって修正が加えられ続けている。Chomsky 自身も、1965年に出した *Aspects of the Theory of Syntax* によって当初とはかなり様相の異った考え方の発展を示している。従って、それが完結に程遠い現状である以上、変換・生成文法の枠組みで日英語の比較を試みるといっても、それはあくまで、基本的にその志向する所に従って、という意味しか持ち得ないことはいうまでもない。加えて生成文法論の私自身の不消化から、又一つには比較の実際上の効用の見地から、論を進めて行く過程で生成文法の基本的な指導原理から外れることがあるだろうことも亦はじめに断っておいた方がよさそうである。ここでは基本的な立場について二、三簡単に記すことにする。

生成文法は、言語研究の目的を人間が有限の材料から無限の発話を生み出し又理解する能力

(‘competence’) の解明にあると考えることから出発する。これが既にデータとして在る言語資料の分割→分類を仕事としてきた構造主義の多くの文法家と根本的に対立する点である。とはいえ、それが従来の構造言語学の成果を全面的に否定するものでないことは Chomsky 自身も言っているとおりでである。構造主義的手法による諸発見がそれ以前の言語学の果し得なかったものであることを一面認めつつ尚それが人間の linguistic competence を解明するには原理的な限界があることを批判し、言語の深層に潜在する一般的な法則を追究し、言語理論がより高い adequacy を獲得するための構想を提示している所にその言語学史的意義があるわけである。変換・生成文法の記述の枠組みを Chomsky に従って簡単に図示すると次のようである。



上の Base system 中の categorial component とは、特定の文法的関係を名詞句、動詞句などのいわゆる major category と (その下位分類と) ‘grammatical formative’ (copula, preposition, postposition など) の並び方で示す部分である。又 lexicon は辞書項目の集合であるが、それぞれの辞書項目はその音形と、semantic な内容と syntactic な諸特徴を含むべきものとされる。syntactic な特徴の中には Chomsky, *Aspects* に提案されているように、純粹に syntactic な下位分類 (‘strict subcategorization’) に関する規則と co-occurrence の制約を定める ‘selectional rule’ とが識別されて記されることが考えられている。(具体例については後に述べる)

上の枠組みを2.で挙げた構造主義のそれと比較して明瞭に異っている点は次のようなことであろう。(1)言語記述の上で上の三部門は、構造主義におけるように互いに独立したレベルではなくて有機的に結びついており、シンタクス部門が中心的位置を占め意味、音韻の部門はそれに「解釈」を与える役割をもっているに過ぎないと考えられていること。(2)syntactic な構造に「深層構造」と「表層構造」の dichotomy を想定すること。(3)Base rule によって生み出される深層構造が意味を決定するのであってそれに種々の変換規則が適用されて表層構造が生成される過程

は意味に関与しないこと等。尚この最後の「変換は意味を変えない」という事に関しては現在もいろんな面から論議がある。

ここでちょっと断っておかねばならぬことは Chomsky らのいう「意味」という言葉の意味である。例えば能動態の文と受動態とは意味が同じでないとする立場もあり得るわけであるが、Z. Harris の言葉を借りると ‘information’ としては同じ内容が伝えられているのだからそれは「同じ意味」であるとするのである。Chomsky は ‘cognitive (又は propositional) meaning’ という言葉で説明している。意味の問題については後に度々触れねばならないだろう。

5. さて概ね以上に述べたような枠組みによってこれから日英両語の比較を行うわけであるが、実際にあたっては多くの困難な問題が予想される。

積極的に期待できる点を先に少し挙げると、上のような言語記述の体系の中で、これまで屢々思いつきの論じられて来た質の異なる雑多な問題がその内容に従って全体の中で一応位置づけられるという事であろう。

現在、シンタクス部門を構成する Base system は universal なものを含む可能性があるのに対し Transformation の部分は明らかに個々の言語によって異なるとされているが、その Transformation の色々な類型 (e.g. 疑問文変形, 受動変形等), 更に抽象的な変換操作の種類 (e.g. 置換え, 除去等) そのものは universal term で示されねばならないから、或る意味で、或る表現形式の差異は、universal なものに照しての差異であると言えると思う。

例えば、或る文から、その或る構成部分が不明で問いの対象となって出来る疑問文の形式を導き出すということは恐らくどの言語にもある事であると思われるが、その変換の型は言語によって異なる。日本語ではその部分を疑問詞にかえて文末に通常の変換の「力」をつける（「彼ハ神戸へ行ッタ」→「彼ハどこへ行ッタカ」）のに対し英語では疑問部分を wh- 語に変えて次にそれを文頭に移動させ、そして述語動詞に通常の変換をさせる。（‘He went to Kobe.’ → ‘Where did he go?’）所でその疑問詞を文頭に移動させる変換規則には制限がある。すなわち ‘You will be in time if you take this train.’ のような文の所謂従属節の中の ‘this train’ が問いの対象となって ‘which train’ となっても、\*‘Which train will you be in time if you take?’ とする事は出来ないのである。これに対し日本語ではそのような疑問語句移動の規則はないから「コノ電車デ行ケバ君ハ間ニ合ウ」は「ドノ電車デ行ケバ君ハ間ニ合ウカ」に変換できるのである。

又或る文が(他の或る文中の)名詞を「修飾する」という場合は色々な種類があり得るが、日本語の

#### 弟ガ持ッテイル写真

のような構造は英語の関係詞構文と本質的に同じで、「写真」は下線部の文の元来構成部分であった(ものと同一である)と理解できるが

#### 弟ガ笑ッテイル写真

のような場合は全くそれとは異った「変換の歴史」を持っている事が明らかである。これは修飾される名詞にどのような資格があれば下線部のような文が修飾語の位置に組入れ(‘embed’)され

るかという事が、英語の ‘My brother is smiling.’ → ‘of my brother smiling’ という変換の規則と並行して考えられなければならないだろう。この様な「文の連体修飾句化」の例を今一つだけ挙げると、日本語で

コノタメ 皆ガ彼ヲ裏切ル結果トナッタ

のような構造と

彼ガ殺サレタ結果オ家騒動が起ッタ

のような構造の差異がある。前者で下線部と被修飾名詞の間には「トイウ」をいれる事ができるが後者ではできない、というような表層的な違いより、両者の変換構造の違いの観点から syntactic に説明される必要がある。そしてそのような眼で見るとき、前者のような構造が、英語の所謂「同格の that-clause」と通ずる所があり、後者は又変換に於て ‘of’ の果す役割と併せて考える必要がある事も明らかとなるであろう。

上のような例に対し、例えばよくいわれる「アタマ」と ‘head’ の違いなどは、辞書項目の中の意義素或いは referent の違いであり、英語で ‘eat soup’ というのに日本語では「スープを飲む」という、といったような事は、同じく辞書項目の内容ではあるが、前節に述べた selectional feature の違いとして位置づけられるであろう。

最後に、前節で述べた枠組みに拠って比較を進める際の困難な点について、既に紙数も殆んど尽きたので記述の大体のプランを示しつつごく簡単に記すことにする。

先ず Base (基底構造) の比較から始めるわけであるが、それを記述する category symbol (NP-名詞句, V-動詞等) 及び Tense, Aspect, Modal 等の文法範疇の内容が問題となる。英語の Auxiliary system は一応 Aux → Tense (Modal) (Aspect) と展開されているがこれに相当する日本語の構造は何であろうか。英語だけを考えてみても、例えば ‘have-en’ はふつう現在完了という ‘Aspect’ を表わすが may などの Modal の後では past ‘Tense’ を表わす。又 be-ing は progressive という Aspect を表わすが ‘leave’ のようにそれ自体瞬間の動作を表わす動詞の場合には未来という Tense を表わす。日本語に於ても、動詞それ自体の含む相の違いによって「～テイル」という形の示す意味は異なってくる。これらをどう記述したらよいか。

従来行われて来たいわゆる基本文型の比較は basic string の型の比較として組入れられるが、その際英語で考えられている S→NP-VP という形に関連して日本語の主格、主語ということを一般的な見地から考え直さないわけにいかないだろう。<sup>(7)</sup> 又、basic string の或種の部分の意味 (e.g. NPガ) が述部の構造の内容の違いに左右される (述部が NPダ, Adj, 形容詞的性格の V, 動作的 V のどれであるかによって NP ガの持つ意味に差が生じる) ことをどう記述したらよいだろうか。

命令文は日本語では主として Mood の変化となる (君ガ行ク→君ガ行ケ) が英語では NP-VP の NP の除去となる。R. Jakobson は ‘You go.’ は ‘cognitive meaning’ を表現する形であるのに ‘Go.’ は ‘conative meaning’ を表現するもので、両者は全く違った次元の言語の function であるから、後者を前者から導くことに激しく反対する。<sup>(8)</sup> その事の当否はともかく、「変換と意



味」の問題については次のようなこととも併せて、考えねばならぬことが多い。

態変換についていうと、日本語の例えば「自発態」変換（「誰カガ魚ヲ釣ル→魚ガ釣レル」）の結果生じる動詞は、「もとの」動詞と異った contextual feature をもつに至る（状態動詞的になる）がそういう事はどこで記述すればよいか。又、間接受身で挿入される「ラレル」が迷惑の意味を附加すること、それが英語の have ('have a house built') が使役に近いのと相似した性格をもつことなども実際の比較に当っては重要なことであろう。

又日本語の或種の形容詞（e.g. ホシイ, コワイ）は主語が一人称二人称の時にのみ用いられ、三人称の時は「～ガル」がつくことになるが、「ガル」は他の「（～テ）オク, アル, シマウ」等と同じく特定の心理的内容を付加するというような事も見のがすことはできない。

以上極めて断片的に問題を羅列したが、以下英語と日本語を具体的に比較して行きながら、生成文法の枠組み自体の含む色々な問題について考えてみたいと思っている。

（1968年1月）

#### 註

- (1) Cf. 安井稔「構造主義統語論」（「ことばの宇宙」1968年1月，2月号）
- (2) Leonard Bloomfield, *Language*, New York, 1933, p.297.
- (3) 空西哲郎「英語と日本語」pp.49—53
- (4) 田桐大澄「日英語の表現の比較」現代英語教育講座7
- (5) 「ことばの宇宙」1967年9月号から「主語」について連続討論が掲載されている。
- (6) Roman Jakobson, 第2回国際理論言語学セミナー（1967年）における講義